



「ヤッターキングがゲムへ潜入した私たちは
うかつにも変な人達に捕まってしまった。」

「少し離れたところでドロンボーとキンズラーも捕まったみたい……。」

「このおーはなせのー！私たちはヤッターマン様に会いに行きたい……。」

ぐい

「侵入者を捕らえた。いつも通り男は独房へ放り込んでおけ。
がキの方は……。」

「くさーん……。」

「私はいたばたと抵抗するが屈強な男の人たちはびくともしてない。」

「騒がしいがキだな、少し黙れ」

「そう男の人が言った瞬間、」



衝撃が訪れたのは数瞬後のことだった。



しん

私のお腹に男の人の大きな拳が
メリメリと音をたてて突き刺さっている。

しん

しん



「お母さんお母さん……」

はっ

はっ

クッ

クッ

続けざまに二発、三発。

「お母さんお母さん……」

数分間続いたソレは私の抵抗を収めるには十分すぎた。
意識が激しく混濁して呼吸がうまくいかない……。

「ぶえええっ……こむゆう……はっ、はっ……」

はは

だっ

だっ

ちよるる……

「……そのへんにしておけ。内蔵が傷ついても修復が面倒だ。
大事な商品なんだからな」

「ちの……」

薄れていく意識の中で……
私たちはどうなってしまふのだろう、という不安が
頭のなかをぐるぐる廻り巡っていた……。



ヤッターキングダムでは捕らえられた女性犯罪者の調教を行う。
ヒトとしての尊厳の破壊から始めるのだ。

「では自慰を始める。思いつきりやるんだ、いいな？」

「え……公園、で……」

「うるさい。早く始めないとお仲間にも罰を与えるぞ？」

「は、は……」

「うう、すごい人に見られてる……」
「……ニニで弁ねちゃだめ、私はやってやるんだ！」



取り巻く人たちの声が聞こえてくる。

「なんであのおねーちゃん裸なの？」

「悪いことをするとあんななのよ。よく見てなさい」

んんん

んんん

んんん

んんん

んんん

「……悪いことしてるのはヤッターマン様たちのせい！
恥ずかしいし、早く済ませちゃおう……」



「あゝ~~~~~ぶっ」

んっ
んっ

んっ

ぬちゅん

ぬちゅん

そして私は自分のマソコをクチユククチュといひり始めた。
家で隠れてしていた時のように自分が一番感じるところを
積極的にぐちゅと刺激していく。





「ふっふっふっ♡ん♡ん♡ん♡あ♡ん♡ん♡」

「……………なんか、いつもより気持ちいい♡……………」

はぁっ♡
「あ♡ん♡ん♡」

はぁ♡

ぬちゅ♡

ぬちゅ♡

だら♡
だら♡

私のおまたからは洪水のように汁が溢れてくる。
こんな経験は初めてだ。

「あ♡ん♡ん♡ふっ♡ふっ♡くっ♡くっ♡」



「おおおおおっ……♡♡ふぁ……♡♡♡♡」

「……ほへえ♡みんなのぞったいおかしー♡お……♡♡
へわたし、へんたいさんだったのかなあ……♡♡♡♡」

「あ……♡♡♡♡」

「あ……♡♡♡♡」

「あ……♡♡♡♡」

むわあ……♡

捕らえた犯罪者には事前に薬を投与してある。

それを知らずに異常な状況で絶頂する事によって、
自分自身に対して疑問を抱かせるのだ。

もちろん調教はこれで終わりではない。

ここでは野外調教の他に、三角木馬による調教も施していく。
囚人たちにより自分の立場を理解させるためでもある。

「ふう……………ふう……………」

「これ……………自分の体重でおまたにびんびんくる……………」

「今から一体……………」



「うんっ……」

突然訪れた衝撃に思わず私は大きな声をあげてしまう。

アッ

バシバシ

バシバシ

バシバシ

ばしんっ……ばしんっ……

「あがっ……んぎい……あああっ……」

経験したことのない鋭い痛みで金切り声を部屋中に響かせる……





全身から汗がどっと噴き出してくる。
心臓がキリキリと痛みを訴えてくる。
「さ、呼吸を整えて……ま、負けちゃダメ……」

「ふふふふ……ふふ、ふふ……ふふ」



「アッ~~~~~アッ~~~~~」

真の赤な蠟が私の身体を赤く塗りつぶして行く。

アッ

アッ

アッ

ポタ
ポタ

「それ、でも……私は……」

「ギリ、と歯を食いしばり気を入れなおす。

「負けない……私は負けない……」

30分後

「かあ...んお...ほおお...」

木馬に跨がり、気絶したまま全身から汁を止めどなく流す

これくらいのことは調教過程では日常茶飯事である。

ヤッターキングダム最新の技術を駆使すれば
火傷や傷跡などすぐに治療可能だ。

市場に出品する際に身体に傷が残っていることはない。

「こいで心が壊れるしまうことが少なくなりが...」

ちよろろ...

それはそれで需要があるのだ。



ここでは後々のために囚人の穴を慣らしておくための訓練を行う。

調教はバランスが肝心だ。
あまり手厳しいことばかりで自殺されたりするのでは元も子もない。

どきん

「これが男の人の……おちんちん？」

「すっごく大きいよお……こんなモノが私の中に入ってきちゃうの……？」





「んっ！おオっ」

んっ

んっ
んっ
んっ

「~~~~~」

「あんのんふんふんふんふんふんふん」

うん

メー

「なんかお腹の下がびくびくくるうんなんなのおこねえし」

男の人は容赦ないストロークで私のアソコをガンガンと突き上げてくる。

110
3/4

110
3/4

「はーっ♡はーっ♡」

「えっ.....もうひとつおちんちん.....」

はぁ♡
はぁ♡

和のアソコは既におちんちんで埋まっている。
「体どうするつもりなのだろう...?」

アッ...

##





グニッ

ゴゴゴゴ

グニッ

「んぎゅいっいっいっほおっいっそこちがうよあっ」
「おしりいっいっおしりのあなだからあっいっいっ」

冷たい汗がわたしの全身を濡らしていく。
犬のように舌をだらしなく垂らして必死に声を張り上げる。

おっいっいっいっ

おっいっいっいっ

おっいっいっいっ

おっいっいっいっ

おっいっいっいっ

んあーいっいっいっ
もちろん男の人達は意に介さず好き勝手に私をおちんちんで弄くり回す。

「あああああ♡ん♡だめだめ♡♡になにこれえ♡♡」

……にも関わらず私の身体は勝手に気持ちよくなってしまう。

こんな絶対変態さんなのになに♡♡

「ああ♡あ♡あ♡あ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

♡あ♡

「私の中で暴れているおちんちんがビクビクと痙攣し始める。

「あああ♡♡くる♡♡私もぎちゃ♡♡♡♡♡」

♡あ♡

♡あ♡

♡あ♡

♡あ♡

♡あ♡



グッ

ガッ

グッ

グッ

グッ

「おっ……くっ……ひい……」

熱い奔流が私の意識を真の白に染め上げていく。
出された精液は収まりきらず、どばどば勢いよく私の穴からこぼれ落ちていく。

はぁ♡

ムニョ

ムニョ

ムニョ♡

ムニョ♡

しばらくの間、何度も何度も精液を注がれ続けた……。

クッ
ゴ
ムニョ
♡

クッ
ゴ
ムニョ
♡



ある程度調教が終わった囚人を奴隷娼館へ売り渡す。
当然奴隷に給料などは
存在しないので双方へメリットがあるというわけだ。

「新入りの子かい……これまた可愛い子が入ってきたなあ」

「ところで君のその格好は一体なんなの……？」

「……私は義賊ドロンジョ様の末裔だよ……」

「貴方たちみたいなお思い大人は
かたっぱしからデコボコしてやるんだ！」

んっ♡

「ふっん……今回はそういうシチュネ……そらあ！」





「おっおっおっおっ」

「ちんぽ入れられてヨがる義賊って……ご先祖さまも泣いてるよ」

「い、今のはびっくりしただけっ」

「おちんちんなんかへでもないんだからっ」

んんん

んんん

んんん

おっ



「ほお♡んおお♡あっ♡あっ♡あっ♡♡♡」

「そんなにはんぽんしないれえ♡お♡♡♡」

あ♡♡♡

お〜

どろろ

ハッハッハ

どろろ

ハッハッハ

「んっ♡ふっ♡んあ♡♡♡」

「ニーんな小さいカラダでしょかり感じちゃって…!」

「ロリンジヨ?ちゃんの一族は相当変態みたいだね…!」

「ちがうよお♡んっ♡そんなおけない♡♡♡」

「おおっ!出すよっ!」

「ロリンジヨちゃんの変態マンコにザーメン叩きつけるの!」

「あんっ♡ほおおっ♡あああっ♡うん♡♡♡」



110
11-14V

110
11-14V





「ふあ……じんお♡」

「ふーっ……なかなかのおまんこだったよ」

子宮にザーメンがどどどどどど押し寄せてくる……♡

この格好で犯されていることに快感を覚えてしまっ……♡

んんん

んんん

んんん♡

んんん♡

んんん♡

こんな気持ち……イケないことなの……♡



「ふっふっふっはあ、はあ.....」

翌日以降も私は娼婦として働かされていた.....
「おおっ.....やっぱり小さい子は締めがいいな」

ぬるぽっ♡



「はあはっはっはおおんっばちゅばちゅくるっ……」

「夕々の当たりかなあこれは！おうっおうっ！」

びびり
びびり



「ふうっんあっんあんっん」

「おちんちん腫奥まできてるよおっ」

アッ

アッ

アッ

「だめ、快感に流されちゃ...!!
せっかくヤッターキンゲラムまで来たんだから!!」

アッ

アッ

アッ

「おいおい、俺のことも忘れないでくれよ」

「んんんんんんんん」

不意打ち気味の喉奥までおちんちんが突き刺さる。
とっさの出来事にむせ返ってしまふ。

「んんんんん」

「んんんんんんんんんんん」

「んんんんん」

「おうっ、どうだ兄弟？」

「こっちの具合もバツグンだね
卸したてはやっぱりクオリティ高いわあ……」

「んんんんんんんんんんんんんんんん」

「んんんんんん、おまんこ……ふへえ」

「よおし！出すぞ出すぞお！」

「零すなよ？ちゃんときんち飲み込めよお……」

「んんんんんんんん……」





「おっおっおっおっおっおっ」

「あーあー、零すなっていってんだろ？」

「まあまあ、こっついう素人のぼさがいんじゃねえか」

むわあ...

ダラダラ

フムフム

どわっ♡

どわっ♡

「この機会に俺たちがシッカリ教えてやるとしますかあ、ひびっ」





こんな生活にも少しは慣れてきたかな...と思いつ始めた頃

「ひひひひひ」

目の前に現れたおちんちんに思わず目を見開いて驚く。

「なに、この大ききや...」

「僕はね、ちいさーいおまんこに
ねじ込むのがすっごく好きなんだあ...」
「どうやってね...」





「はぁ♡……はぁ♡はぁ♡……」

はぁ♡

はぁ♡

ビクッ♡

ビクッ♡

私のお腹がポコポコと見たことないカタチへ変形している……！

（いぎいぎ♡妊婦さんみたいになってるっ）

「やっぱり……やって奥の奥まで愉しまないとねえ……」



「キス………おれがあなたを……」

キス

女

NEED

そういう男の人はゴリゴリと胸中をかき回してくる……



「あー、気持ちいいわー」

あー♡♡♡

ぬちゅ

あー♡♡♡
あー♡♡♡

それでも今までの経験の積み重ねが、
このひどい状況を私の身体は快感へ変換してしまう。





おなかを突き破りそうな勢いで叩きの付けられた精液はひとしきり膣中を泳いだあと、ぶわゅ……と私のマソコから鏡のように溢れだす。

はーっ♡

快感

「はあのはっ♡ふへっ♡」

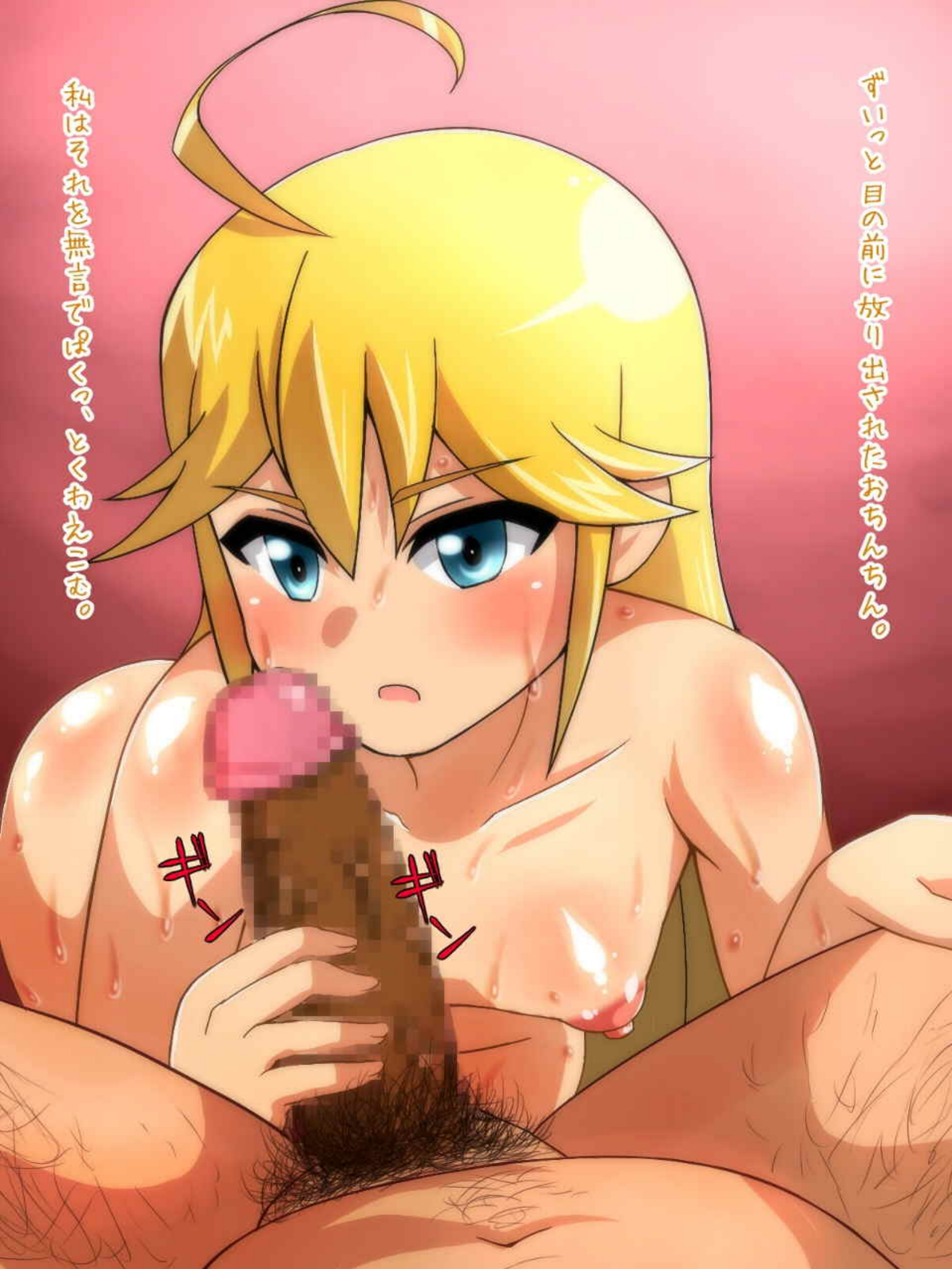
「……………おれちゃう♡」

「ふう、この征服感がたまらないねえ……」

How~♡

ずいっと目の前に放り出されたおちんちん。

私はそれを無言でぽくっ、とくおえこむ。



「ちゅるっ……ぬぶぶっ」

自分の体液と男の人の精液が混じったそれを丹念にしゃぶっていく。

♡♡♡

ほおっ♡

「いっつも思うけど……なんか変な味……」



「かわいい娘さんが顔を歪ませてフェラしてるのがぐっどくるねえ」

んふっ♡

703♡

男の人は行為が終わるとぼいたいこうしてお掃除させることが多かった。
望まずとも自然に、フェラが上手くなるてしまう。





「びびっ…ちゅるっ…ちゅるるるっ」

「んっ…♡飲みきれないっ…溢れちゃう……♡」

上手くイカせたことに少し喜びを見出してしまおう。

セックスするだけのこの狭い生活で唯一の楽しみになってしまっていた。

んん

チンポの
シズン

んん

へちがう、隙を見つけて脱出しなきゃ……♡ママの無念を晴らすんだ……♡

（そのためにもしっかりと仕事してカモフラージュするんだっ♡♡

「ぬぼぼっ♡♡にゅんゅん♡♡」

んん



立ち上る湯気の中、私は複数の男の人と交わっていた。

「んぽおちちんすっぴいよおちちんもっとかんがんきてっ」



「この来てどれだけの時間が過ぎたのか。もうおからない。」

「このガキもすっかりにに染まっちゃったなあ」

「んっ♡♡」

「んっ♡♡」
「んっ♡♡」
「んっ♡♡」

「こんな環境でまともな神経を保てるわけないしな」

「性技ばっか上手くなっちゃって、ガキは吸収力がちげーな」



「んっのぬぬぬうんふっの」

愛しいモノのようっ！一歩不惑にしゃぶりつく。

たったったっ♡

とっくの前に気がついてた。

「ヤッターマン様にデコボコしてはくくより...

セックスしてるほうが気持ちいいし楽しいよっ♡

この快感を知ってしまった。男の人に犯される喜びを。

んっ
んっ...♡





「おめんねママ.....おめん、おめんなさい」

「おいおい、なんか謝りだしたぞ？」

「てめーみたいに犯されるだけしか
能がないがキを産んだママもかおいらうになあ」

ジュウ

「じゃあほっおめんなさいおめんなさい」

「お前にできることは俺らを果しませることだけだろうか!!
もっと尿をふれよう!!」

「はいっふりますっお尻っぽいふりますっ」

ジュウジュウ

ジュウジュウ

ジュウジュウ

ジュウジュウ

「くっ.....望み通irikれてやるよっ! あああああっ!!」

「おめんねママ.....おめん、おめんなさい」



「あーっ……んぶぶぶっっじゅるっっっ」

身体のあちこちに付かった精液が汗のにおいと混じって生臭い香りが部屋中に充滿する。

ぢゅんっ

ぢゅんっ

ぢゅんっ

ぢゅんっ

その臭いを嗅いでいくだけで軽くイってしてしまう。私はなんてイケない子なのだろう……っ

「このがキの賞味期限もそろそろか？」

「まあ長く保ったほうなんじゃない？」

「やっぱり初々しい時が一番だよね」

そんな男の人達の会話が徐々に遠のいていき……私は意識を失った……っ

むあああ……っ

生臭いエグい臭いがツンと鼻をつく。

こゝは奴隷の最終処分場。様々な過程を経て使用価値なし、と判断された奴隷はこゝへ移送される。

実質ヤッターキングがダムの統治に不満を持つ最下層たちの鬱憤解消の場となっている。



「へへ、今日は俺が一番乗りみたいだな……」

「ち……このクソがキ穴がゆるゆるいゃねえか……」

「まあこんな穴ぼこでも自分でするよかあなんぼかマ……」

ぬる……



「おらあ！少しは役立ってみろこのガツキワイフがよお」

「……………」

「ふっ……ふっ……ふっ……なーにがママだよ！てめえが母親になればいいだろか！」

「中に出してやる！ありがたく受け取れメスガキ！」

ぬるる…

ぬるる…






「ふーの………今回きた奴隷もハズレだな
どいつもこいつもオナホ以下の価値しかねえ」

「あつ……………あつ……………」

「……………お……………お……………」

ク
ソ
ッ
ッ
ッ





こいつ連れてこられた奴隷は毎日浮浪者などに輪姦され、精液のみを食べて生きてゆく。
餓死してしまったってもそれを愉しむ輩もいるようだ。

ヤッターキングがダムはこのシステムより
治安の確保と犯罪者の有効利用を実現した素晴らしい王国である。

貴方も滞在許可証を取得してヤッターキングがダムに居住しませんか？
安全で快適な夢のような王国がこいつにあります。



END